

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2019 年度
氏名	松下 晶子	指導教員 (主査)	田中 勝博

論文題目	動的学校画にみる学校適応感と抑うつ感の検討 —放課後等デイサービス利用児童を対象に—
------	---

本文概要

【問題と目的】 放課後等デイサービス(以下、放課後デイ)は、主に発達障害の診断を受けた、またその傾向のある児童を支援している。発達障害傾向のある児童は、学校などでの集団適応に困難を抱えやすく(鈴木,2017)、その経験が自尊感情を低下させ、抑うつ症状、不登校などの二次障害を引き起こす可能性につながり、その後の精神衛生上のリスク要因を抱えている(宮地,2013)。しかし、放課後デイにおいて、利用児童の不適応状態や学校生活上の問題を把握する方法については未整備で、先行研究も殆どないのが現状である。学校不適応は、単純に学業不振や対人関係の問題それ自体よりも、彼らを取り巻く学校環境の雰囲気やイメージといったものが、彼らにとってどのように感じられているかということも、大きく影響するのではないか。本論では、学校をテーマとした描画法である動的学校画(Prout & Phillipa,1974,以下,KSD)を通じて、放課後デイ利用児童が抱く学校イメージについて、量的および質的に検討し、児童の状態像を把握することを目的とする。**【方法】** 放課後デイを利用している小学 3~6 年生の計 22 名(男児 17 名, 女児 5 名, $M=10.09$, $SD=1.27$)を対象に、半構造化面接にて KSD を行い、PDI (描画後質問, 以下 PDI)および質問紙、①子ども版自己記入式抑うつ尺度(DSRS-C)(村田, 1996)、②小学生用学級適応感尺度(江村, 2012)を実施し、KSD の描画項目の出現頻度及び、質問紙の結果を先行研究と比較した。また PDI の内容分析及び KSD に表出された学校イメージを事例的に取り上げた。

【結果】 尺度学級適応感尺度の平均値および標準偏差は、「居心地の良さの感覚」 $M=2.36$, ($SD=0.27$) 「被信頼, 受容感」 $M=1.93$, ($SD=0.31$), 「充実感」 $M=2.47$, ($SD=0.34$)であった。松沼(2016)の学級適応感得点の平均値および標準偏差を用い、対応のない t 検定で比較を行ったところ、いずれも有意な差が認められた。DSRS-C の平均得点および標準偏差は $M=13.74$ ($SD=3.73$)。傳田他(2004)の平均値および標準偏差を用い、本研究で得られた抑うつ得点の平均値について、対応のない t 検定で比較を行ったところ、($p<.01$)有意な差が認められた。描画人物像では「身体が欠けている」項目の出現度数が学校実施群と比べ 20%多く、教示した「人物像すべてあり」は学校実施群の 96%に対し、放課後デイ利用群では 57%を示した。「先生・友達・その両方がいない」は 43%の出現率であり、その内約半数が先生像を描いていない。また、いずれの人物像でも、正面向きの出現率が学校実施群よりも高かった。PDI では、友達と交流している場面、自己への期待が含まれる明るい展望、環境変化も含む他者への期待などが語られ、良い関係を描きながらも一方で周囲に変わってもらいたいと回答する傾向にあった。

【考察】 抑うつ感と学級適応感の「居心地の良さの感覚」に有意な負の相関があり、「居心地の良さの感覚」は、放課後デイ利用児童たちの精神的健康にとって重要であることが推察された。居心地の良さは、自身がその場にいたい・その場に安心していられるという感覚であり、放課後デイ利用児童が抱える、拠り所のなさが抑うつ感の背景にある可能性が考えられる。KSD での人物像の省略については、Machover(1949)の、抹消は不安の存在を示唆することや、自己イメージや自己概念の欠損表現であると考えられ、放課後デイ利用群の抑うつ感に影響を及ぼしていたとも推察される。教師像の省略は、孤立感や拒否的感情の強さと関連するものであるという臨床的知見とも一致し(高橋他,1991)、彼らが学校に対しての強い葛藤を抱えていることが窺われた。描画表現に表れた学校イメージは、PDI で語られた友好的な表現とは異なる表現が多く、児の認知しているであろう学校イメージが表現されたと考えられる。